

くろまつのか

くろまつない

北限のフナとともに生きる田舎^{まち}と
そんな田舎^{まち}に^ま寄せる人々



春

瑞々しく

その豊かな保水力は
清らかな川の流れを生み出し、
多くの動植物の生命を
預かります。

古来、ヨーロッパでは
繁栄のシンボル、「森の母」と
呼ばれてきたブナの森。

黒松内町の歴史は、
そんな豊穡ほうじょうの森からの
多くの恵みを享受しながら、
刻まれてきました。

母なる森に

彩られし、

黒松内の四季



秋

麗しく

黒松内

北限のブナとともに生きる^{まち}田舎と
そんな^{まち}田舎に心寄せる人々

黒松内で過ごす時間を、より楽しくする一冊です。

ブナ林と繋がる人たち

農業と自然、そして福祉。

ブナ北限の地に根差し、黒松内の歴史を今に繋ぎ、
そして未来へと引き継ぐ産業に身を置く、
三人三様の黒松内時間。

略 農 家 武田吉正・直子さん

アウトドアガイド 辻野健治・治子さん

福祉施設スタッフ 佐藤美弥子さん

黒松内をてくてく歩き

風を感じながらゆっくりと歩くことで見えてくる、
この^{まち}田舎の一際輝く多面的な魅力。

みんなで歩むブナ北限の里づくり

住み続けたい、訪れたい魅力的な^{まち}田舎であるために、
私たちが果たすべき役割。

ブナと歩む黒松内の歴史 1928～2010

明治の開拓以降、幾多のドラマが訪れた我が^{まち}田舎。
その変遷を辿ることで見えてくる、大切な価値。

ブナ

樹皮は灰白色で表面が滑らか。その上に灰青色
や緑色、暗灰色をした地衣類(菌類と藻類が共生
した植物の一群)が付着し、独特なモザイク模様
を成しています。葉は丸みを帯びた波形に縁取
られ、互い違いに7から13本並ぶ葉脈を持って
います。



夏 萌ゆる

そして現在、
私たちは更なる発展を目指し、
「みんなで歩むブナ北限の里づくり」を
合言葉に、
町民と町が手を取り合いながら、
^{まち}田舎づくりを進めています。
ブナ林と農村特有の
牧歌的風景を活かした、
オンラインワンの^{まち}田舎を目指して。



冬 津々と

ブナ林と 繋がる人たち



トラクターで朱太川を渡り、向こう岸に広がる牧草地へと向かう吉正さん。



武田牧場

黒松内町字中里
TEL.0136-72-4013
<http://www.takedafarm.utasai.jp>

春から夏にかけて、この田舎は南南東からの風が連れてくる深い海霧にすっぽりと覆われ、しばしば低温に見舞われる。冬はといえば、道南有数の豪雪地帯と謳われるのがこの地域。北からの季節風が次々と灰色の分厚い雪雲を運んできては雪を落とし、ときに積雪は3メートルほどにも及ぶという。

そんな厳しい気象条件を問わずも備えてしまっているこの田舎においては、畑作よりも気候の影響を受けにくく安定した生産量が見込めることから、酪農が主要産業で在り続けてきた。乳牛約1400頭、肉牛2200頭の飼育頭数は、いずれも後志管内随一の規模。新鮮で上質な乳を加工したチーズやアイスクリームが黒松内ブランドとして道の駅等で好調な売れ行きを見せるなど、牛飼いがたちが手塩にかけて育てた牛たちからの恵みは今も昔も変わらずに田舎の経済を支えている。

歌才ブナ林に隣接する中里地区で暮らす武田吉正さんは、黒松内を代表する酪農家の一人。昭和中期から続く武田牧場の三代目として、30haもの広大な牧場を妻の直子さんとともに切り盛りしている。何より牛の健康を第一に考えて、昔ながらの放牧酪農を導入。さらには飼育頭数を50頭に絞るなど、ストレスフリーな環境作りに力を注ぎながら乳質の向上と安定した生産体制の構築に余念が無い。

飾らないもてなしが、都市と農村を繋ぐ。



酪農家

武田 吉正・直子さん

都会の忙しさに疲れた旅人が、無為の時間を過ごしていく武田牧場。まっとうに牛飼いを続けてきた農家が期せずして作り上げた、優しく心に寄り添う自然美と、しなやかさ溢れる暮らしに包まれて。



代々守り継がれてきた牧草地。

1. 一様に毛艶の良い健康そうな牛たちが、高い木立が作る日陰でのんびりと身体を休めていた。 2. 牧場を東西に貫く朱太川。釣りのメッカとしても知られる清流だ。 3・4. 訪れたのはよく晴れた夏の日。うだるような暑さもなんのと、吉正さんは淡々と牧草の刈り取りにいそしんでいた。 5. 餌となる昆虫を狙って、キタキツネが時折姿を見せる。

を訪れる旅人を受け入れることで、都市と黒松内を繋いでいるのだ。中には名古屋から毎年のように訪ねてくる熱烈なファンもいるというから、観光面での経済効果という意味でも、その存在意義は大きいといえよう。

しかしながら、実のところ、ここにはサービ斯拉しいサービスは存在しない。テレビやクーラーも無いし、吉正さんにしても直子さんにしても陽の出ているうちは農作業に追われ、ゲストと言葉を交わすのは夜になってからやつとというケースも少なくないという。ではなぜライダーハウスをやるのかと聞いても「私たちがあまり外に出られないから、逆に来る人たちに色々と情報をもらっているんです(笑)」と直子さんは素っ気無い。

それなのに、この牧場の人気のほどはどうだろう。前述した名古屋のリピーターの他にも、まるで季節風みたいに毎年決まってやってくる旅人が実在するのだ。ほんとうに不思議なんですよ、と直子さんは笑う。「だって唯一サービスといえるのは、朝に搾りたての牛乳を出すのと、畑で収穫したばかりの野菜と肉でバーベキューするくらいのものですからね」。

建物自体の魅力もあるかもしれない。「払い下げられた古い列車の車掌車を手直した」というライダーハウスはトタンの屋根と伐りっ放しの丸太にすっぽりと身を包んでいるため傍目にはピンと来



6. 一人息子の陽平君と猫数匹、犬1頭と暮らす二人。とつとつと言葉を紡ぐ吉正さんと快活な直子さんのバランス感は絶妙で、作る空気はとても温かい。マラソンが共通の趣味だとか。 7・8・9. ライダーハウスは六人定員。一時は月に20人ものゲストで賑わっていた頃も。吉正さんが自ら切り出した丸太や古い枕木を使って設けた自作の木製デッキは、ゆったりと語らうのに最高の居心地。 10. 懐っこいモルは宿のアイドル。

ないが、内部の設えは健在。4畳分のスペースに腰掛けて天井からぶら下がるファンや電球を目にしていると、今にもゴトゴトと音を立てて走り出しそうな気がするほど雰囲気がある。

しかし、それ以上に言えるのは、これだけ自然豊かなロケーションがあれば、都会人にとってはそれで充分なのだということ。取り止めもない人付き合いに疲れた彼らにとっては、武田さん夫婦の一切負担したところのないもてなしも、逆に心地良く響くのに違いない。聞けば、旅人は皆、何をするわけでもなく、思い思いにひっそりとした時間を過ごしては帰途に就くのだという。さっぱりとした満足気な笑みと、再訪の約束を残して。

「ほんとうにのんびりとしたものですよ。バイクでふらつとやってきては、昼はひたすら釣り糸を垂らしたり、夜は夜で、焚き火を焚いて、そのまわりに腰を下ろしてぼーっとしたり。みんなそんな感じですから」。直子さんが頷く。「そうそう。することがなさ過ぎて手持無沙汰になっちゃって、しまいに牧場作業を手伝ってくれたりしてね」。

「朱太川」の清らかな流れに貫かれ、美しい歌才ブナ林へと繋がっている武田さんの牧場。ここには、ここしかない時間がゆっくりと流れている。そんな中、何にも縛られることなく、自分なりのリズムで過ごす一日。それはきっと、最高に贅沢で心落ち着く時間に違いない。

ブナ林と 繋がる人たち



添別ブナ林の入口。あちこちで可愛らしい稚樹が顔をのぞかせ、生きた森であることを教えてくれるのがこの森の特徴。治子さんによれば「腐葉土のおかげでふわふわとして歩き心地が抜群」なのだろうか。



アウトドアガイド

辻野 健治・治子さん

山岳ガイド夫婦のプライベートは、過程にある発見を楽しみながらの悠々とした山登り。

それは、足るを知るまちとの出会いを経て、確立した境地。

あるがままを受け入れて、満ち足りる。

北は北海道南西部の渡島半島から、南は九州まで。温帯域に幅広く分布する落葉広葉樹のブナ。黒松内町はその自生北限に位置、国の天然記念物に指定され、

気軽に触れ合えるのが特徴。故に、その美しき森は黒松内町にとって無二の宝であり、町民にとつての心の拠り所となっている。

92 haの大きな懐に多くの動植物の生命を預かる歌才を始め、成木から芽吹いたばかりの子孫までが混在する添別や北限の最前線を張る白井川など、幾つかの大規模なブナ林を有している。歴史的・学術的にみても非常に高い価値を有する一方、例えば牧草地などといった人々の暮らしの場に寄り添うようにして群生しているため、その四季折々の美しい色づきや多様な生物環境としての一面に日常的かつ

道内出身で、口元に蓄えた髭とメガネ

がトレードマークの辻野健治さんと、そのパートナーであり、人懐っこい笑みと快活な語り口が気持ち良い東京生まれの治子さん。彼らはとりわけ、黒松内のブナの魅力をよく知る二人である。というのも、彼らはそれぞれ登山歴30年以上を有する登山ガイドとして、体力や経験に不安を抱える登山愛好家を確かなスキルで道内各地の山の頂きへと導きながら、

その一方で、植物図鑑のごとき豊富な知識を武器に、四季折々にブナ林の散策に訪れるナチュラリストたちをガイドしているのだという。

「実はブナのことは、ここに来るまでは、あまりよく知らなかったんですけどね」と話すのは健治さん。趣味として山登りに親しんだ20代の頃から土木行政の現場仕事に身を捧げた前職時代にかけて、幅広く道内津々浦々の山野を見て歩いたにもかかわらず、ブナを知ったのはこの田舎で暮らし始めてからなのだという。しかし、いったんその個性的な表情に惹かれてからというもの、触れるたびに新



ノースランド

黒松内町熱帯26-9
TEL.090-7652-4508
<http://monbalau.blog10.fc2.com>

落雷に大半を燃やされながら、それでも立つことをやめなかったブナの古木。今は地衣類やつた系植物のより所になっている。



たな発見があると、今ではすっかり心酔している様子だ。「何度となく向き合っているうちに、思った以上に奥が深くて面白い植物だということが、どんどん分かってきたんですよ」と建治さん。「枯れて倒れて、また芽生えるという更新の過程にも他の木には見られない独特のプロセスがあつて、これはすごいなあと。そういった素質の部分を超えて、さらに突き詰めていくと、町民の日常生活との関わりかたという側面がある。すなわち、伐採や保護といった歴史に翻弄された紆余曲折が、一つのストーリーとして成立しているんですよ」。



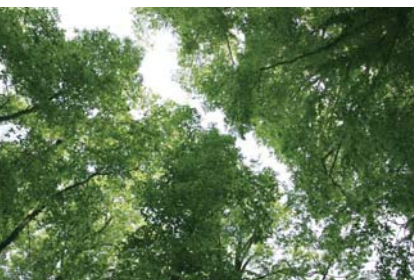
1周約2キロの散策路は発見の連続。
二人はしばしば足を止めて、植物の様子を観察する。

北海道120年の歳時記の中で多くの貴重な森林が損なわれてしまったことは周知の事実だが、歌才ブナ林がその悲しい歴史の一部に加えられようとした事実を知る者は地元以外では比較的少ない。例えば、太平洋戦争時には武器を製作するための物資の不足を穴埋めする資材として。あるいは、戦後の財源不足を解消するための切り札として、町がその美しい樹相に向けて斧を振りかざそうとしたこともあったそう。しかし、そのたびに防波堤となつて開発を食い止めたのが他ならぬ住民有志。地域によって大切に守り継がれてきたのが歌才ブナ林であり、健治さんはそうした歴史的背景も含めて、興味を持つてみているのだという。

一方の治子さんも、ブナ林に健治さん同様の深い愛情を抱いているそうだが、彼女の場合、その思いはブナを大事に守りながら生きてきた田舎と、そんな土地で暮らす人々へ寄せる信頼へと繋がっている。

「私がここに住むことに決めた一番の理由は、自然を大切に扱いながら生きてきた価値観に共感したからなんです。わざわざ立派な公園を作つて外来種の園芸樹を大袈裟に植えてみたりとか、今の目の前にあるものを大事にしない方向も現実として目に付くじゃないですか。でも、黒松内町はそれとは違って、私たちの足元に存在してきたものをきちんと評価してあげて、認める視点を持っている。それも歌才の例に見られるように、ずっと昔から。そんな気質が脈々と継がれているって、素晴らしいですよ」。

2009年に完全に根を下ろして以来、この田舎への愛着を深めている二人。そもそも、手に入れることよりも与えることに重きを置いてきたというライフスタイルと、「今、ここにあるブナを大切に思うこと」を軸に据えて様々な物事を推し進める田舎の価値観がそぐわないわけ



ブナ林ならではの美しい
陰影がそこかしこに。辻
野さんのガイドがあれば、
そうした感動と出会う
可能性が2倍3倍にも膨れ
上がる。



「普通」の暮らしを悠々と満喫中の健治さんと治子さん。二人が「派手ではないですね。素朴な風土そのものが、持っている人柄に表われている気がしますね」と表現する黒松内人の気質は、そっくりそのままこの夫妻も当てはまる。

がない。月日が経つごとに、二人の「足るを知る」精神は大いに触発され、研ぎ澄まされているようだ。たまの休みに楽しむプライベートでの山登りにも、それは現れている。お気に入り入りをぶらぶらままに登るのは以前からのことだが、ここ最近は頂上を目指すことが、めっきり少なくなったという。健治さんはあつけられかと話す。「大事なものは成果ではなく、過程だと思うようになったんですよ。頂上を10としたら、今はせいぜい8くらいでいい。天気が悪くて8まで辿り着けなくても、もう一度やり直せばいいだけのことですし。明日の天気はどうかとか、装備は万全かとか準備の段階も既に楽しいですね。ま、年を取っただけのこともかもしれないですけど(笑)」。治子さんが続く。「そう、歩いている最中が楽しければ、それでいいじゃないって思いますね」。

「普通が一番」。健治さんが、たびたび口にする言葉だ。誰かと競い合うわけでもなく、自身の限界を測るわけでもない自分にとって最も心地良いリズムで歩み続けられ、心にはゆとりが生まれ様々な気付きが得られるのに違いない。例えばささやかな自然の息吹、植物や動物たちの小さな営み、季節の匂い、風の音。あるがままの黒松内をゆつたりと生きる二人の営みには、息を切らして汗を流して辿りつく極みとはまた別の、格別な充実感があるのだろう。

ツナ林と
繋がる人たち



社会福祉法人黒松内つくし園は、特殊な家庭環境からの保護・自立支援を目的にした児童養護施設からスタートし、現在は後志一帯にて老人介護施設など17の施設を運営。



社会福祉法人 黒松内つくし園

黒松内町字黒松内562-1

TEL.0136-77-2833

<http://www.tsukushien.or.jp/>

札幌で花のOL生活を送っていた佐藤美弥子さんがこの田舎との間に持った最初の接点は、道の駅「トワ・ヴェールⅡ」にて。初めての道南ロングドライブ。恐る恐るハンドルを握って訪ねたパン屋さんの、丁寧な仕事ぶりが伝わる美味しさに感動を覚えたが、それ以上に心に残ったのは、他では感じたことの無い、田舎全体を包む不思議な居心地の良さだったという。以後も二度、三度と足を運ぶうちに、そんな黒松内町の風土に次第に感化されていった佐藤さん。片道3時間の距離も回を重ねるごとに短く思えるようになり、同時に、町民との心の距離も目に

見えて縮まっていったという。「道の駅や交流施設を訪ね歩くのに飽き足らず、イベントにも参加するようになったんですね。するとあまりにも頻繁に顔を合わせるので、地元の人々が顔を覚えてくれて。そんなある日のこと。「今度は実行委員でイベントに参加しませんか」。そんな思いがけない誘いが届く。しかし、何しろ札幌から通うのでは物理的に限界があり、不規則な参加ではかえって迷惑をかけてしまうので、佐藤さんは一度、丁寧に断りを入れる。だが、一方の町民にとっては「おらがまち」をそんなにも気に入って、足繁く通ってくれる存在はそ

うそういないもの。その誠実で気さくな人柄も後押ししたのである、勧誘の声はその後もしも止むことなく、「来られる時だけでいいんだよ」との一言が決め手となった。果たして、実際のその後は「週末イコール黒松内状態(笑)」。交流の機会が増えるに従って、心を許しあえる存在も増えていく。するとまた、彼らに会いたくなり、田舎を恋慕う。人情に満ちたそんな循環の渦に飲まれた佐藤さんにとって、黒松内は旅先というよりも、いっしょに「還るべき場所」に変わっていた。そうして8年前、佐藤さんは晴れて黒松内に移住。名実共に町民の仲間入りを

確かな縁の上に成り立つ、自分らしく、幸せな暮らし。



福祉施設スタッフ

佐藤 美弥子さん

求めるものが見えたなら、そこにまっすぐに向かっていくべき。温かな人の縁にも恵まれて満ち足りた暮らしを手にした佐藤さんの決断。



入所者や他のスタッフからの信頼も厚い佐藤さん。園内を歩くと、自然に人の輪が生まれることも。8年目を迎えた黒松内暮らしの意義を、「除雪が大変だし、夏は虫が多いし、大型スーパーも遠い。でも、それ以上に得るものがあります」と説く。

果たした。新天地でのリスタートには雇用の問題がつきものだが、佐藤さんの場合は、それはさしたる障害とはならなかった。というのも、彼女が元々興味を抱き、「いつかはこの仕事に」と憧れを寄せていた福祉は、町民の約1割が従事しているというデータが示すように、この小さな田舎における主要産業であり、それゆえ雇用の場に比較的恵まれていたからだ。もちろん、佐藤さん自身の黒松内愛と福祉仕事への尽きない興味が直接的な要因ではあったが、昭和31年の発足以降、町と共に先進的な福祉政策を牽引してきた社会福祉法人黒松内つくし園の存在が無ければ、今も佐藤さんは週末を迎えるたびに長時間のドライブを強いられていたかもしれない。

「不便はありますけど、失ったものは特に思い当たらない」と断言する佐藤さんは今、知的障害児施設「しりべし学園」の中核スタッフとして業務に追われながら、充実した毎日を過ごしている。

「時間に縛られずに天然記念物(歌才ブナ林)をゆっくり見られるだけでも、ここに住んだ甲斐があったなって。最近では家庭菜園も楽しいし、フットパスコースを歩きながら山菜採りに出かけたたりと、黒松内の風土を全身で満喫中」と、晴れ晴れとした表情で語る。

人との縁、仕事との縁。そんな確かな結びつきの上に成り立つ暮らしは安定し、満ち足りたものだろう。



標高190メートルからの町並は、華やかな建物もなくこぢんまりとまとまっていますが、豊かな緑と調和しながら、農村ならではの素朴で美しい景観を成していました。

ここは黒松内の市街地を見下ろす、冬はスキー場に変身する東山公園。町内に四つあるフットパスのうちの一つ、チョボシナイコース上にある、黒松内で一番のビューポイントです。爽快な眺めをひとしきり楽しんだ後は、見所溢れる町内を散策するべく、草木が茂る未舗装路を辿って下山すると、麓に流れる「朱太川」にぶ

つかります。陽光を反射させながら日本海へ向かうこの清流は、鮎やイワナの住処。秋には鮎の遡上も見られる生命の温床が住宅地のすぐ傍を流れているなんて、実に贅沢な環境です。

30分ほど歩いて市街地を抜けると目の前には牛たちが悠々と草を食む、長閑な牧草地が続きます。やがて緩やかな丘の先に見えてくる緑の屋根は、町内産の素材を加工した特産物が味わたる「トワ・ヴェール」。暑い日には新鮮な牛乳から作るアイスクリームでさっぱりと。寒い季節にはチーズフォンデュが最高です。

ところで、黒松内といえばブナウォッチングが欠かせない所。今度は南へと折り返し、ブナの全てが分



歌オオートキャンプ場
ル・ピック



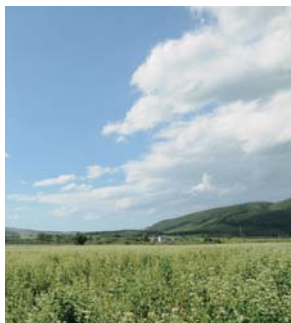
健康増進交流センター
黒松内温泉 ぶなの森



自然体験学習宿泊施設
歌オ自然の家



特産物展示販売施設
トワ・ヴェールⅡ（「道の駅」くろまつない）



人の営みと大いなる自然が緩やかに寄り添うのんびりとした景観が随所に。



かるブナセンターを経由して天然記念物の歌才ブナ林へ。春の新緑から純白に包まれる冬まで、四季折々に豊かな表情を楽しめるのがこのエリアです。春から夏にかけては散策路にひっそりと咲く、ギンリョウソウが目を楽しませてくれます。

それにしても、どこを歩いても行き届いた整備と素朴な風情に目を眩ります。フットパスコースには木製のサインが完備され、ブナ林の散策も快適そのもの。聞けば、たくさんのお客様が汗を流しながら整備を手掛けているのだとか。そんなストーリーも魅力の、黒松内歩きです。

七つの交流拠点



添別ブナ林農村自然公園
ミニビジターセンター（簡易宿泊施設）



特産物手づくり加工センター
トワ・ヴェール



ブナの資料展示・実習工房
ブナセンター



自然にやさしく・人にやすらぎの田舎^{まち}

みんなが ブン北限の里づくり

農業の「生業」が生み出す農村特有の田園風景や牧歌的風景は、生産物に優るとも劣らない、価値ある産物です。黒松内町には、自然との共生を意識した20年間の歴史のうちに磨き上げた、そうした農村空間が広がっています。

私たちは、この無二の素材を活かしながら、小さくとも豊かさを感じる田舎の姿を守り続けなければなりません。そのためには、これから先も町民と町、そして町外にいる黒松内ファンの方々が一緒になって田舎づくりに取り組むことが不可欠。それが新たな黒松内ファンを生み、交流と、その延長線上にある二地域居住、完全移住へと繋がり、やがては黒松内町オリジナルの「自然にやさしく・人にやすらぎの田舎」を次代へ継承することになります。



黒松内の
将来像イラスト

単なる観光開発ではなく、地域のシンボルである北限のブナ林を核に川や湿原といった自然環境や牧歌的農村風景、交流施設を有機的に結びつけ、それぞれの機能を最大限に発揮させながら新時代の黒松内を形づくっていく、ブン北限の里づくり。

持続可能な利活用で輝きを放ち続ける地域資源、町民共有の財産を田舎に訪れる人々へ提供しつつ、ブン北限の里として自然・農村空間を創造し続けていきます。

ブナの森に抱かれた里で、私たちは互いに手を取り合い、ささやかながらも幸せを感じられる素朴な田舎を目指します。

振興

冷涼な気候や広大な土地を活かした特色ある農業が営まれ、市街地は小さいながらも賑わいのある空間に。新たな産業や環境共生を重視した企業も進出しています。

自然や牧歌的景観、食、町民との触れ合いに魅力を感じる黒松内ファンが何度も田舎を訪れ、移住者も増えています。



人材

子供たちは意欲的な学習で学力を養う一方、自然や文化との触れ合いを通して健やかな身体と豊かな感性を身につけ、自立心旺盛な人材に成長。一方で大人も生き活きと学習やスポーツ活動に取り組み、学んだ成果を地域に還元。誰もが主役になれる環境の中、次世代を育てる活動に熱心に取り組んでいます。

安心

里山や温泉施設などを活用した健康づくりが盛んに行なわれ、高齢者がはつらつと活躍しています。また、地域に暮らす住民同士の絆が深まり、田舎全体で子供たちを守り、支え、育



黒松内で暮らしませんか？



豊かな自然環境や農村ならではの生活・文化に惹かれた移住者たちがいます。朱太川での魚釣りや自家菜園作りなど、悠々と趣味を満喫する人。農業を生業に選び、日々、土にまみれる人。あるいは家具、和菓子や豆腐といったものづくりに生きる人、絵画、写真などの創作に勤しむ人。皆、それぞれに黒松内の風土を慈しみながら送る第二の人生はとても輝いたものです。

詳しくは町ホームページ内の移住情報サイトを。空き家や町営住宅といった住まいの情報、そして既に移住された方々が語る黒松内幕らしなど、移住をお考えの方に役立つ情報が満載です。



http://www.kuromatsunai.com/kuro_immig/index.htm



黒松内で楽しみませんか？

四季折々に豊かな表情を見せる自然。人の営みが作りだした牧歌的風景。田舎ならではのゆっくりとした時間の中で、そうした都会にはない宝物と向き合う贅沢さを味わってみませんか。地域に愛着と誇りを持つ私たちだからこそできる、普段着のおもてなしでお迎えします。



自然に触れるフットパスコースや、滞在型の旅の御案内はこちらから。

<http://www.kuromatsunai.com/footpath/>
<http://www.kuromatsunai.com/bunasadotourism/index.html>

ブナ北限の里が目指す姿

経営

町民、事業者、町の三者がスクラムを組み、夢や危機感を共有しながら発展していく協働の田舎づくりが進行。NPO団体や地域コミュニティなどが誕生し、新たな公共の担い手として活躍しています。その先には、ささやかながらも、ゆとりと豊かさを実感できる地域社会が機能しています。



北限のブナや鮎が棲む朱太川、その周辺で営まれる酪農や畑作など、黒松内の生物多様性に優れた自然農村空間は、私たちを優しく包み込み、恵沢を与え続けています。道路や情報通信網といったインフラや災害に対する準備もしっかりと整い、便利さを享受できる、安全な田舎になっています。

生活

ていていこうとする意識が根付き、その先には、お互いが支え合う誰もが安心して暮らせる環境があります。



ブナと歩む黒松内の歴史

1928～2010

2008 (平成20年)

景観法で定める「景観行政団体」に。統一感のある街並づくりを更に推進する契機に

2009 (平成21年)

朝日新聞が主催する「にほんの里100選」に浜中町とともに選ばれる。道内ではこの2町だけの快挙

2010 (平成22年度)

生物多様性条約第10回締約国際会議(COP10)と合わせて、名古屋市で開催された「生物多様性国際自治体会議」にて、ブナ北限の里づくりを発表。一定の評価を得たことにより、次年度に策定する「生物多様性地域戦略」への弾みに

2010 (平成22年)



「黒松内新道」が開通。道央自動車道と国道5号を橋渡しするこの道路の誕生により、道央圏からのアクセスが向上

2009 (平成21年)

1998 (平成10年)

町唯一の温泉施設「黒松内温泉ぶなの森」がオープン。エコツアーや山村留学、自然ガイドを養成する「黒松内ぶなの森自然学校」が開校

1999 (平成11年)

道の駅くろまつない「トワ・ヴェールⅡ」が白井川地区にオープン。パン工房とベーカリーレストランに加え、2010年にはピザ工房も開始



2004 (平成16年)

北限のブナ林として歌才、添別、白井川のブナ林が、北海道遺産に。ボランティアとともに、フットパスコースを整備する取り組みがスタート



環境省が実施した学校エコ改修と環境教育事業において、道内で唯一のモデル校として選定された「黒松内中学校エコ改修」が完了。改修後の校舎棟が「第20回北海道赤レンガ建築賞」最上位賞の建築賞を受賞

2007 (平成19年)



1995 (平成7年)

個人より添別ブナ林取得

1996 (平成8年)

牧歌的風景を守るため、「ふるさと景観条例」を制定

1997 (平成9年)

添別ブナ林の隣接地に自然体験や環境学習の滞在スペース「ミニ・ビジターセンター」をオープン。環境基本条例を制定

黒松内町農協が羊蹄山麓7町村の各農協と合併、JAようていとなる



黒松内銘水株式会社工場落成。ミネラルウォーターの生産が始まる

1997 (平成9年)

1990 (平成2年)

「一年にたった一度でいいから牛に感謝する日を」との思いを込めた町内最大のイベント「ビーフ天国」を開催



1991 (平成3年)

「ブナ北限の里づくり」の中核施設、「歌才自然の家」オープン



もち米純米酒「櫛のせせらぎ」を発売

1992 (平成4年)

ともにブナを町木とする縁で繋がった、愛媛県野村町(現西予市)との間に姉妹町提携を調印

黒松内産ワイン「櫛のささやき」発売

朱太川内水面漁業協同組合の鮎ふ化場が開設

町内を定期巡回する福祉バス運行開始

1992 (平成4年)

1993 (平成3年)

町内産の牛乳や豚肉を原料に、高品質なチーズやアイスクリーム、ハム、ソーセージなどを製造する「トワ・ヴェール」、ブナに関する情報収集や発信機能を備えた「ブナセンター」、オートキャンプ場「ル・ピック」。三つの交流施設をオープン



渋谷吉尾さん(故人)さんの長年にわたる活動が、豊かな生活文化づくりに貢献しているとされ、読売新聞社主催の「94北のくらし大賞」優秀賞を受賞

1994 (平成6年)

プロローグ ～林学博士 新島善直の発見～

「まるで北のヤシの木だ」。黒松内におけるブナ林の歴史は、大正12年6月、天然記念物調査員として歌才ブナ林を訪れた林学博士新島善直氏が発した、この一言に始まります。高さ20m以上の大木が伸び、上方にだけ枝葉を広げた林相の素晴らしさに感動した氏は、同年10月、「周囲はほとんど全く開墾しつくされたる土地中に、かくのごときぶなの原生林を残留せるは奇蹟というべし。よりて天然記念物として永久に保存し、植物学上の研究に利用すべきものなり」と調査会へ報告。この調書に基づき、歌才ブナ林の天然記念物指定が決定したのです。



新島善直 (にいじま よしなお)
1871～1943

東京生まれ。東京帝国大学林学科を卒業後、札幌農学校(後の北海道大学)最初の林学教授に就任。1905年に森林資源管理の先進国ドイツへ留学し、林学界の權威ザリッシュの薫陶を受ける。その後、札幌農学校の後進、東北帝国大学農科大学において林学科の講義のなかに「森林美学」という科目を設置した。

1985 (昭和60年)

4月、ブナ林との共生を軸に据えたまちづくりの基本方針「第一次総合計画」スタート。5月、まちづくり推進委員会設立

1986 (昭和61年)

3月、町木にブナを指定。11月、まちづくり推進委員会が「横北限の里づくり構想」を町へ提言

1988 (昭和63年)

歌才ブナ林の天然記念物指定60周年を記念する「ブナフォーラム88in歌才」開催。もち米焼酎「横しずく」を発売

ブナ林の伐採危機 1944年(昭和19年)

ときは太平洋戦争末期。戦局の悪化が深刻な物資不足を招き、底をついた鉄の代わりとして木材が重用されるようになりました。この際、飛行機のプロペラ用にと着目されたのが、歌才のブナ林だったのです。しかし北方植物の權威、館脇操北海道大学教授がその価値を主張。北限のブナ林は辛うじて伐採を免れました。

ブナ林の2度目の伐採危機 1954年(昭和29年)

合併を目前に控えた黒松内村は、財政赤字を埋めるための財源として歌才ブナ林に着目。伐採を視野に、国に天然記念物指定解除を働きかけます。しかし、そこに待ったをかけたのが地元住民有志でした。文化財保護委員会や衆議院議員といった関係各所に「歌才ブナ林の恒久保存を訴える請願書」を送付するなど保護運動を展開。指定解除は回避されたのです。

『樺(ぶな)』から『横(ぶな)』へ 1985年(昭和60年)

曲がりやすく加工ににくい性質を持つブナは、価値のない木との意味で、「木」偏に「無」を合わせて「樺」と表現されます。しかし、一方では美しい樹相から「森の母」、豊かな保水力が下木や動植物を癒すことから「森の医者」と讃えられ、高い学術的評価を得ているのもブナの特徴。そうした事実や天然記念物に指定されていることも町民にとっては誇りであり、もはや町に欠かすことのできない貴重な存在であることから、「木」偏に「貴」と書く、黒松内オリジナルの名称「ぶな＝横」が誕生したのがこの頃でした。

1989 (平成元年)

ブナ北限の里づくり構想が本格的にスタート。第3セクター「株式会社ブナの里振興公社」設立

1954 (昭和29年)

『ブナ林の2度目の伐採危機』

1944 (昭和19年)

『ブナ林伐採危機』

1928 (昭和3年)

歌才ブナ林92ha天然記念物指定

ブナの歩み

1928
(昭和3年)

まち 田舎の歩み



開拓者たちの魂を後世に伝えるべく、手作りのかんじきを町民に無償提供してきた渋谷吉尾さん(故人)の功績を讃え、若者グループが第一回渋谷吉尾杯かんじきソフトボール大会を開催

1988 (昭和63年)



児童養護施設「黒松内つくり園」開園

1956 (昭和31年)

1月、町政施行し「三和町」となり、5月に「黒松内町」へ改称

1959 (昭和34年)

従業員600余名を有した「大榮鉱山」が大東亜戦争勃発により止むなく閉山

1936 (昭和11年)

黒松内保線区、機関区の廃止

1945 (昭和20年)

黒松内村、熱郭村、樽岸村、中ノ川地区の合併により、三和村となる

1955 (昭和30年)

長輪線(長万部⇄伊達紋別間＝現室蘭本線)の開通により、鉄道の拠点が長万部に移る

1928 (昭和3年)

黒松内酪農組合(後の黒松内町農業協同組合)設立

1932 (昭和7年)



黒松内町長 若見雅明

大正12年、天然記念物調査会の新島善直博士が歌オブナ林を訪れ、「周囲はまったく開墾しつくされたる土地中にかくのごときブナの原始林を残留せるは奇蹟きせきというべし」との調書を残して以来、88年の歳月が経ちました。

その間、先人はブナの森を^か掛け^が替えのない財産として守り、北限のブナは植物、動物、そして人をゆっくりと育て、人々の思い、歴史、美しい田舎を形づくり、素朴な豊かさや心の豊かさとして、今もなお多くの恵みを与え続けています。

平成22年10月、名古屋市での生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)と合わせて開催された「生物多様性国際自治体会議」では、北限のブナと共に歩んできた黒松内の風土が、我が国の貴重な財産として国際的に高く評価されました。

私たちは、先人が遺した豊かな自然と
牧歌的な風景に包まれた空間をしっかりと
守り続ける責務があります。

この冊子は、黒松内に思いを寄せ暮らす私たちが、みんなで手を取り合って歩み続ける田舎づくりの今、そして未来を一つにまとめたものです。

北限のブナの地の物語が、次の世代に語り継がれることを願っています。

平成23年3月

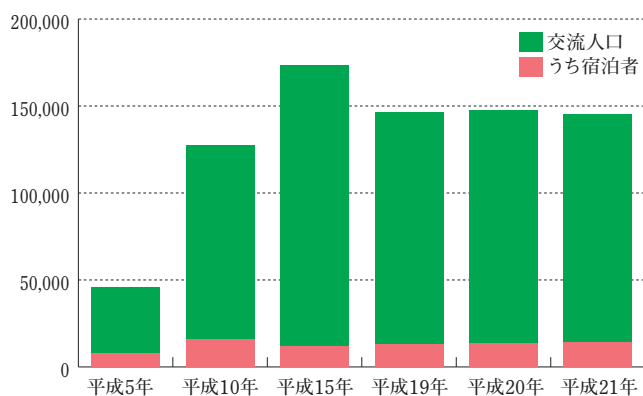


■人口の推移

区 分	世帯数 (世帯)	人 口 (人)			一世帯当たり 平均人員 (人)
		男	女	計	
昭和30年	1,340	3,752	3,686	7,438	5.55
昭和40年	1,374	3,081	3,097	6,178	4.50
昭和50年	1,286	2,263	2,429	4,692	3.65
昭和60年	1,333	1,976	2,238	4,214	3.16
平成 7 年	1,581	1,931	1,944	3,875	2.45
平成17年	1,387	1,625	1,832	3,457	2.49
平成22年	1,358	1,535	1,715	3,250	2.39

国勢調査(各年10月1日)

■交流人口の推移





黒松内の語源

アイヌ語で「クル・マツ・ナイ＝和人の女のいる沢」

位置

北海道南西部、札幌市と函館市のほぼ中間点に位置。北は寿都町を経て日本海、南は長万部町を経て太平洋を臨みますが、いずれも直接海岸に接することのない特殊なロケーションにあります。

地勢

高山や平野が少なく、町土のほとんどが丘陵地を成しています。町の中央部を貫きながら、太平洋側から日本海へ向けて流れる朱太川、その支流である黒松内川や熱帯川などの中小河川の流域に農地が形成されています。市街地は、JR黒松内駅周辺に形成されていますが、管内を通過する幹線道路から外れた地域にあるため、緑地や河川などの良好な自然が比較的多く残されているのも特徴です。

気候

春から夏にかけては、南南東の風が内浦湾で発生する濃霧を運び、しばしば低温に見舞われます。冬は北西の風が、ときに2m以上に及ぶ大量の積雪をもたらします。





バツと目を引く華やかさには欠けている。
でも、その表情は優しいけど、
忘れられない個性に満ちている。
ブナの木と黒松内町のひとたち、どこか似ている。

発行
黒松内町
〒048-0192
北海道寿都郡黒松内町字黒松内302番地1
TEL.0136-72-3311
<http://www.kuromatsunai.com>
企画・編集
ソーゴー印刷株式会社 スロウ編集部
〒080-0047
北海道帯広市西16条北1丁目25番地
TEL.0155-38-4188
<http://www.n-slow.com>